

本邦最初期の《メサイア》演奏を担った女性たち

津 上 智 実

The Women Singers in the Earliest Performances of Händel's *Messiah* in Japan

TSUGAMI Motomi

Abstract

This paper aims to clarify the backgrounds of the female singers who sang in the earliest through performances of the first to the third part of Händel's Oratorio *Messiah* in Japan, namely of December 20th 1925 in Tokyo, and of March 27th 1927 in Osaka and April 16th 1927 in Tokyo.

As the result of the survey of contemporaneous rosters and letters, it was found that the female soloists of the 1927 Osaka performance, Edna Outerbridge as soprano and Stella Graves as alto, were both music teachers at Kobe College.

In the chorus of the 1927 Tokyo performance, an alumna of Kobe College, MORIMOTO Nui, was included, who studied music with missionary teachers and was teaching music in female schools in Tokyo.

Of the women members of its chorus, more than half were missionary ladies and their companies (nine out of the fifteen soprano, seven out of the thirteen alto members). A clear gender bias can be recognized here, because only four of the thirteen tenor and only one of the fourteen bass members were missionaries and their companies, with quite many corporate male workers and still young male students. In 1920's Japan, women who were capable of singing *Messiah's* highly elaborate choral compositions in English were practically restricted to women missionaries and their relatives and companies, who had been instructed in music outside Japan or in Christian schools in Japan.

Keywords: Händel, *Messiah*, Missionary ladies, Chorus

要 旨

本稿は、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の本邦における最初期の3つの「通し演奏」(1925年の東京での日本初演、1927年の関西初演と東京再演)について、これらの演奏を担った女性の歌い手に着目し、どのようなバックグラウンドを持った女性たちが歌唱を担当したのかを明らかにすることを目的とする。

同時代の名簿や書簡を検討した結果、関西初演の女性ソリスト2名(ソプラノのエドナ・アウタブリッジとアルトのステッラ・グレイブス)はいずれも神戸女学院の音楽教師であったことを明らかにした。また、東京再演の合唱メンバーには、本学卒業生の森本縫が含まれること、ソプラノ15人中の6割、アルト13人中の過半数が宣教師の関係者であり、男性パートの状況(テノール13人中の3割以下、バス14人中は1人のみが宣教師関係者で、企業人や学生らが多い)とは大きく異なっていることが判明した。ここには明らかなジェンダー偏差が認められる。1920年代の日本で、高度なポリフォニー曲の連続する《メサイア》の合唱を英語で歌える層は限られており、女性宣教師ならびに宣教師に連なる人々の参与がくっきりと浮かび上がってきた。

キーワード：ヘンデル、メサイア、婦人宣教師、合唱

0. はじめに

ハレルヤ・コーラスを中心に明治期から散発的に行われてきたヘンデル Georg Friedrich Händel (1685~1759) のオラトリオ《メサイア *Messiah*》(1741) の演奏は、1920年代半ばになると、第1部から第3部までの全3部を包含する形での「通し演奏」が次々と行われた。本稿は、それら最初期の《メサイア》演奏を担った女性の歌手手に着目し、どのようなバックグラウンドを持った女性たちが歌唱を担当したのかを明らかにすることを目的とする。そこからは、婦人宣教師ならびに宣教師に連なる人々の参与が浮かび上がってくるはずである。

1. 《メサイア》の初期「通し演奏」

本邦における《メサイア》演奏については、奥田耕天「日本におけるメサイア初演」(1975) や河村泰子「本邦における《メサイア》受容について」(2020) といった先行研究があるが、前者は概略的で、後者は資料研究に不足がある。筆者は、現存する演奏会プログラムと関連の報道記事とから、本邦における《メサイア》の最初期の「通し演奏」は次の3つであることを明らかにした¹。

1925年12月20日の日本初演 (F. ゲーリー指揮、東京：青山女学院大講堂)

1927年3月27日の関西初演 (長井齊指揮、大阪：淀川善隣館)

1927年4月16日の東京再演 (F. ゲーリー指揮、東京：日本青年館)

その際、独唱者や指揮者等に加えて、1927年の東京再演については、全合唱メンバーの名前が判明した。残存する演奏会プログラム²の裏面に合唱メン

1 2021年11月14日に日本音楽学会第72回全校大会(於：信州大学人文学部)での研究発表「ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演：その実態と背景」において、筆者はこれら3つの通し演奏の実態を明らかにした。その詳細については別稿にまとめる予定である。

バーの一覧があり、ジャパン・タイムズ *The Japan Times* の報道記事 ‘Messiah to Be Presented Here By Tokyo Body’ (1927年4月15日付) にも合唱メンバーの名前が列記されているからである。その合唱メンバーの中に ‘Nui Morimoto’ の名を見出したことが、今回の調査研究の発端となった。後述のように、森本縫は本学の卒業生である。また、1927年の関西初演のソリストについて、先行研究に見られる誤りを正すことも本稿のめざす成果の一つである。

2. 演奏者（ソリスト）たち

上記の3つの《メサイア》演奏について、ソリスト（指揮者ならびに伴奏者を含む）をまとめたものを「表1：演奏者（ソリスト）一覧」として示す³。ここで網掛は宣教師、括弧内は宣教師の派遣団体の略号⁴である。

-
- 2 東京芸術大学附属図書館所蔵「小山作之助旧蔵 演奏会プログラム等コレクション」の第7冊「1926年～1927年」に含まれる「東京コミュニティ・オラトリオ協会」「第4回コンサート」のプログラム。
 - 3 1925年の東京での日本初演については1925年12月17日付ジャパン・タイムズの記事 ‘“The Messiah” Is Rendered In Tokyo On Sunday Evening, Tokyo Choral Society Will Present Handel’s Wonderful Oratorio at the Aoyama Jo Gakuin Auditorium’ の記載、1927年の関西初演については東京芸術大学附属図書館所蔵「小山作之助旧蔵 演奏会プログラム等コレクション」の第7冊「1926年～1927年」に含まれる1927年3月27日の演奏会プログラムの記載による。
 - 4 宣教師団体の略号 (*Japan Mission Year Book*, 1928)
ABCFM (=American Board of Commissioners for Foreign Missions) アメリカン・ボード
ABF (=American Baptist Foreign Missionary Society)
EPM (=Foreign Missions of the Presbyterian Church of England) 英国長老派教会
LCA (=Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America)
MCC (=Methodist Church of Canada) カナダ・メソジスト教会
MEFB (=Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church) メソジスト監督教会
PN (=Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church) 長老派宣教委員会
PS (=Executive Committee of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States)
RCA (=Reformed Church in America)
RCUS (=Reformed Church in the United States)

表1：演奏者（ソリスト）一覧（網掛は宣教師、括弧内は派遣団体の略号）

日時・場所	演奏者
1925-12-20 東京	指揮：Fred D. Gealy [MEFB]、伴奏：Chester G. Curtiss, Rev. Hannaford [PN], S：三瀧牧子, Jessie W. Galt [EPM], A：Lena G. Daugherty [PN], T：斎藤齊, B：J. R. McKenlay
1927-3-27 大阪	指揮：長井齊、伴奏：E. S. カープ, S：E. Outerbridge, A：Stella M. H. Graves [ABCFM], T：Graham Batter, B：B. F. Shively [UB] → W. C. Buchanan [PS]
1927-4-16 東京	指揮：Fred D. Gealy [MEFB]、伴奏：Chester G. Curtiss, S：Netke-Löwe, A：Lena G. Daugherty [PN], T：Graham Batter, B：J. R. McKenlay

(S=ソプラノ、A=アルト、T=テノール、B=バス)

この中で女性の演奏者について、各人のバックグラウンドを略述する。

まず、1925年の東京の独唱者の内、ソプラノ独唱を担った三瀧牧子は東京音楽学校の卒業生（鶴橋 1927, 124）、重唱曲⁵のソプラノ声部を歌ったジェシー・ガルト Jessie W. Galt は1922年来日の EPM (=Foreign Missions of the Presbyterian Church of England) 英国長老派教会の宣教師で英和女学校の教師を務め、1924年には台湾の台南に赴任していた人物である（Directory 1924, 452）（CM⁶ 1925, 657）。1925年と1927年の東京でアルト独唱を担当したレナ・ドゥエルティ Lena G. Daugherty は1915年来日の PN (=Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church) 長老派宣教委員会の宣教師で、女子学

SDA (=Seventh Day Adventists) セブンスデー・アドベンチスト教会

UB (=Foreign Missionary Society of the United Brethren in Christ) キリスト同胞教会

UCMS (=United Christian Missionary Society)

UGC (=Universalist General Convention)

WSSA (=World's Sunday School Association) 世界日曜学校協会

YMJ (=Yotsuya Mission) 四谷ミッション

- 5 第17曲のソプラノとアルトの二重唱曲〈He shall feed His flock〉。曲番はエディションや演奏者によってまちまちで統一的な表記ができないので、本稿ではワトキンズ・ショー編纂によるノヴェットロ・ヘンデル・エディションの曲番に従って記載することとする。
- 6 CM は *The Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Yearbook of Christian Work* の略記。

院の教師であった (Directory 1924, 449; 1928, 391)。1927年東京のソプラノ独唱のネトケ＝レーヴェ Margarete Julia Netke-Löwe (1884～1971) は東京音楽学校の外国人教師として多くの日本人声楽家を育てたことで知られるソプラノ歌手である。

さて、問題は1927年大阪のソリストである。1927年3月27日の《メサイア》関西初演 (大阪：淀川善隣館) について、指揮者の長井齊 (1893～1985) は次のように記している。

その時のソリストがまた異色でした。ソプラノは関西学院長アウトブリッジ夫人、アルトは同志社のグレープスさん、テナーは神戸駐在英国領事館長バター氏、すばらしい美声の持ち主でした。バスは同志社のシャイブリー師に代わった名古屋のブカナン師でしたが、いずれも堂々たる顔ぶれでした。合唱部は93人、伴奏のペダル・オルガンは同志社のカップ師の力演でした。(長井 1979, 57) (下線引用者)

この記述は、翌1980年に出版された長井の回想録でも踏襲され (長井 1980, 86)、『大阪コーラルソサエティ』70年史もこれに依拠している (191)。しかしながら、下線を引いた3人の所属はいずれも誤りである。

まず、ソプラノ独唱のアウトブリッジ夫人は、関西学院の宣教師アウトブリッジ師の妻エドナ・アウトブリッジ Edna Outerbridge (1887～1965) であるが、夫のハワード・アウトブリッジ Howard W. Outerbridge (1886～1976) が関西学院長になったのは戦後のことであり (1947年から学長、1950年から理事長)、関西初演が行われた1920年代には、夫のハワードは神学部教授 (関西学院七十年史編集委員会編 1959, 35-36) であり、妻のエドナは本学音楽学部の声楽教師を務めていた。本学の音楽教師一覧によると、1913年から1915年まで神戸女学院嘱託音楽教師、1921年から1924年まで同声楽教師であった (長谷川 2006, 14)。これについては、本学第5代院長のシャーロット・デフォレスト Charlotte Burgis De Forest (1879～1973) の書簡 (1922年4月26日付リ-

夫人宛、DFL No. 78) にも次の記述がある。

Now the vocal work of the school is much on the increase. We have had to employ Mrs. Outerbridge (a Canadian Meth. Missionary's wife) for vocal lessons for our best pupils, since last September… (津上 2017, 72)

すなわち1921年9月から、エドナは本学で最も優秀な生徒たちに声楽を教える仕事に就いていたのである。そもそもエドナは牧師の娘として生まれ、来日前にはカナダで音楽教師をしていた人物であった(クランメル 1996, 194)。

アルト独唱の「同志社のグレイブスさん」についても同様である。ステラ・グレイブス Stella Marie Graves (1895~1968) はアメリカンボード日本派遣婦人宣教師で、1924年9月から1927年まで神戸女学院教師で音楽部長を務めていた(宮崎 1926, 185)(長谷川 2006, 15)。その力量を見込まれて若くして音楽部長として本学に招聘されたグレイブスであったが、以前から部長代行を務めていた卒業生教員が不服を申し立ててトラブルを起し、結局グレイブスは退任に追い込まれた⁷。院長のデフォレストはこの一件に心を痛めた様子で、その後、グレイブスの両親や本人宛に心のこもった書簡を書き送っている。とりわけ1930年10月8日付グレイブス宛書簡(DFL No. 299)では、同志社への推薦が実効を持たずに終わった理由についても説明されており、神戸女学院を迫られたグレイブスに対して同志社に職を斡旋する努力がなされたものの実現しなかったことが知られる。ここから「同志社のグレイブスさん」は誤りであることが明らかである。

また、テノール独唱は「神戸駐在英国領事館長バター氏」とされているが、グラハム・バター Graham Batter はイギリス外交官リスト (*The Biography of*

7 1927年5月4日付リー夫人宛デフォレスト書簡(DFL No. 143)に詳しい経緯の説明がある(津上 2018, 86-91)。また津上智実「今年度の調査と1930~1931年のデフォレスト書簡に見る音楽教育」中の「(2) 元音楽部長ステラ・グレイヴズ」(津上 2020, 28-29) 参照。

British Diplomats in Japan, 1859-1945) には名前がない。『ディレクター・オブ・ジャパン』巻末の外国人リストによれば「Rising Sun Petroleum Co. Ltd., Osaka Shosen Bildg., Kaigandori」すなわち石油会社勤務であった (Directory 1927, 429)⁸。

このようにソプラノ、アルト、テノールの3人のソリストの所属に関して、長井の記述はいずれも間違いである。演奏 (1927年) から回想録出版 (1980年) まで半世紀以上が経過しているので、記憶が上書きされたり、思い違いが生じたりしたものと考えられる。記憶は間違ふという前提で、回想録などは慎重に取り扱う必要があり、やはり同時代の資料で確認する重要性を痛感する。

このように、1927年の《メサイア》関西初演において、女性のソリストは、ソプラノもアルトも神戸女学院で声楽を教える音楽教師であった経歴を持つという事実は記憶されて良いであろう。

3. 合唱メンバー (1927年東京再演)

次に、1927年の東京再演について、合唱メンバーをまとめたものを「表2：演奏者 (1927年東京再演の合唱メンバー) 一覧」として示す。ここで網掛は宣教師、括弧内は宣教師の派遣団体の略号 (注4参照) である。ジャパン・タイムズの記事はもちろんのこと、演奏会プログラムにおいても名前の記載はアルファベット表記のみであり、括弧内の漢字表記は筆者が追記したものである。

これらの合唱メンバーについて、どのようなバックグラウンドを持っているかを略述する。声種別に、まず外国人、次に日本人の順に記す。

8 グラハム・バターが「すばらしい美声の持ち主」であったのは事実のようで、1927年の大阪に続いて同年東京でも招かれてソリストを務めている。その際、ジャパン・タイムズ (1927年4月12日付) に紹介記事 ‘Mr. Graham Batter, Soloist in Messiah, Is Experienced Singer’ が掲載され、その輝かしい経歴から教会音楽のスペシャリストの歌い手であったことが知られる。

表 2：演奏者（1927年東京再演の合唱メンバー）一覧
 （網掛は宣教師、括弧内は派遣団体の略号）

声	氏名（娘、妻、子は宣教師の娘、妻、子の意）
S	I. Alexander [娘], Mrs. Boyd-Bowman, Orpha Coe [MEFB], T. Costa, Martha Harder [LCA], Misako Hiraoka, Nellie Hyre [YMJ], M. Iglehart [娘], Suzuyo Imamura [今村寿々代], Bernice Kent [UGC], E. Kressler, Hanaye Kurihara [栗原花枝], Makiko Mitsuma [三瀧牧子], Nui Morimoto [森本縫], J. Palmer [UCMS]
A	Georgene Bowen, Henrietta Cook [RCUS], Lena Daugherty [PN], Gertrude Hamilton [MCC], Helen Hurd [MCC], Mrs. E. T. Iglehart [妻], Fusa Ito, Marion Perkins [PN], Dorothy Robson, Mrs. N. K. Roscoe, Dora Wagner [MEFB], N. Carus-Wilson, Michi Yamaka
T	H. E. Coleman [WSSA], R. H. Fisher [ABF], E. T. Iglehart [MEFB], C. P. Kane, E. Kashiwara, N. C. Roscoe, L. Scott-White, H. Tamama, S. Tsugita, J. H. Wild, H. Yagi, T. Yamaguchi [山口隆俊], A. Yoshida
B	Gordon T. Bowles, C. Dykhuizen [RCA], T. F. Haertle, M. Himeno, J. Roy McKenlay, A. Morikawa, T. Okamoto [岡本俊明], J. W. Palmer, J. Robson, M. Sano, Mitsumi Sato, F. Seki [關不二雄], S. Yokomae, Stewart Young

3-1) 合唱のソプラノ・メンバー

外国人メンバーの内、ソプラノのイザベル・アレクサンダー Isabel Alexander（1910-?）は宣教師夫妻の娘として1910年に東京に生まれ、長じて青山学院で英語と音楽を教えることになる人物である（クランメル 1996, 3）。上演時には17歳であったことになる。

オルファ・コー Orpha M. Coe（1902-?）は1923年来日の MEFB（=Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church）メソジスト監督教会の宣教師で、青山学院教授であった（Directory 1924, 447; 1925, 680）（基督教年鑑 S2, 316; クランメル 1996, 52）（Directory 1928, 397）。

マルタ・ハーダー Martha M. Harder は1926年来日の LCA（=Board of Foreign Missions of the United Lutheran Church in America）宣教師で、1928年9月からは九州女学院で教鞭を執っている。

ネリー・ハイラ Nellie L. Hyre は1926年来日の YMJ（=Yotsuya Mission）四谷ミッションの宣教師である（Directory 1928, 399）。

マーガレット・アイグルハート Margaret Iglehart は、テノールのアイグル

ハート E. T. Iglehart 宣教師とアルト・パートを歌うその妻との間の娘であり (クランメル 1996, 129)、両親に連れられて練習および演奏会に参加したものと考えられる。

ベルニーチェ・ケント Bernice W. Kent (1903-?) は1922年来日の UGC (=Universalist General Convention) 宣教師で、所属教派は日本同仁基督教会であった (Directory 1924, 25-26/宮崎 1926, 359)。

ジュウェル・パーマー J. Palmer は1918年来日の UCMS (=United Christian Missionary Society) 宣教師で、滝野川に在住していた (Directory 1924, 465; 1928, 409)。

次に日本人メンバーの内、今村寿々代は1921年4月から東洋英和女学校の英語と音楽の教員を務めていた人物である (東洋英和女学校 1934, 357)。栗原花枝は「渡米中」(音楽年鑑 1929, 96) と『音楽年鑑』にあるが、詳細は不詳である。三瀧牧子についてはソリストの項で既述の通り。森本縫については別項を立てて後述する。

3-2) 合唱のアルト・メンバー

次にアルトの合唱メンバーを見ると、ヘンリエッタ・クック Henrietta Cook は1926年来日の RCUS (=Reformed Church in the United States) 宣教師で、仙台在住であった (Directory 1928, 390)。

ゲルトロード・ハミルトン Gertrude F. Hamilton (1888-1975) は1917年に来日した MCC (=Methodist Church of Canada) カナダ・メソジスト教会の宣教師で、東洋英和女学校の音楽教員を務め、後に校長 (1925~1930, 1931~1938) となった人物である (クランメル 1996, 103/日本キリスト教歴史大事典) (Directory 1924, 454; 1928, 397)。

ヘレン・ハード Helen R. Hurd (1886-1984) は1911年来日の MCC (=Methodist Church of Canada) 宣教師で、1912年から1913年まで (東洋英和女学校 1934, 366) と、1924年から1930年まで東洋英和女学校で教えた (クランメル 1996, 126/宮崎 1926, 333) (Directory 1924, 456)。

アイグルハート夫人 Mrs. E. T. Iglehart (1881-1966) は宣教師夫人で、結婚前は音楽教師であって、ドルー・レディーズ・セミナリーで音楽を教えていた(クランメル 1996, 129/来日西洋人名事典, 1)。

マリオン・パーキンス Marion O. Perkins は1925年来日の PN (=Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church) 長老派宣教委員会から派遣の宣教師で、女子学院の教員であった。

ドロシー・ロブソン Dorothy I. Robson は、ニューヨークに本社のあるスタンダード・オイル株式会社の日本支社(東京および横浜)⁹ に勤務する勤人であった。

ロスコー夫人 Mrs. N. K. Roscoe (1891-1947) は勤人の妻で麻布在住であった(Directory 1927, 771)。テノール・パートを担った夫のロスコーはケンブリッジ大学卒業後、東京の領事館勤務として1915年来日し、1921年からは妻の父の会社(Chilian Nitrate Committee, & 12 Shinyudo-cho, Azabu-ku, Tokyo) に勤務した(Directory 1927, 771)。夫婦で合唱に通っていた形である。

ドラ・ヴァーグナー Dora A. Wagner (1888-1980) は1913年来日の MEFB 宣教師で、1923年から1933年まで東京女子大学校で教えた。教会オルガニストとして、また聖歌隊指揮者としても活躍した(クランメル 1996, 280)(Directory 1924, 473; 1928, 418)。

なお、ソプラノの4名(Mrs. Boyd-Bowman, Tryphena H. Costa, Misako Hiraoka, Else Kressler) とアルトの4名(Georgene E. Bowen, Fusa Ito, N. Carus-Wilson, Michi Yamaka) については、これまでの調査では情報が得られていない。

4. 森本縫

合唱のソプラノ・メンバーとして名前のある森本縫(?~1937) は、神戸女学院の普通科19回(1902年卒業)及び高等科(1907年卒業)の卒業生で、1909

9 Standard Oil Co. of New York, Tokyo & 2479 Kaso Negishi-machi, Yokohama (Directory 1927, 770)

年4月から1914年9月まで神戸女学院で教鞭を執っていた。担当は音楽であった（長谷川 2006, 14）。

本学「音楽部レッスン帳」¹⁰によれば、その間、森本縫は本学で音楽のレッスンを受けている（津上 2010, 146）。1909年の春学期から1911年の春学期までデフォレストのピアノ・レッスンで、ショパン F. Chopin 作曲〈華麗なる大円舞曲 Grande Valse brillante〉作品18やシューベルト F. Schubert の〈アンプロンプチュ Impromptu〉作品142-2（暗譜）、シューベルトの〈主題と変奏 Thema und Variationen〉変口長調、メンデルスゾーン F. Mendelssohn の〈無言歌 Lieder ohne Worte〉29, 33, 40番（暗譜）などを学んでいる。その後、2年ほどウィルバー夫人（Mrs. Wilber）に、1914年冬学期にはアウトブリッジ夫人に声楽を師事している。1911年から1913年まではグッピー嬢（Miss Guppy）に、1914年冬学期にはボイヤー嬢（Miss Boyer）にピアノを習っている。

その後、「音楽研究のため上京、瀧の川女子聖学院¹¹に教授せらる」（35）と同窓会誌『めぐみ』58号（1914年8月）は伝える。「音楽部レッスン帳」にも、1914年の春に上京し、女子聖学院で教えながら、ピアノと声楽をペッツォールド夫人の元で学んでいるというデフォレストの手書きのメモがある¹²。1927年5月現在の『中等教育諸学校職員録』（東京：中央教科書協会）によれば、当時の森本縫は東京女学館¹³の唱歌、洋琴担当の教員であった（106）。

10 本学「音楽部レッスン帳」については、その一部の写真を『100年前の卒業生、小倉末子』に掲載している。

11 女子聖学院は1905年に米国プロテスタント教会の婦人宣教師によって東京築地の宣教師館に創設された女子のための教育機関で、神学校からスタートして次第に拡張された。

12 デフォレストのメモ書きには、'Voice Culture, some two years with Mrs. Wilber. Winter 1914 with Mrs. Outerbridge. / Piano, 1911-13 with Miss Guppy. Winter 1914 with Miss Boyer. / Left. From spring of 1914 in Tokyo, teaching at the Joshi Sei Gakuin and studying both piano and voice with Madame Petzold.' とある。

13 東京女学館は1888年に開校された女子教育機関で、良妻賢母主義であったと同校の百年史にある。百年史巻末の「東京女学館教職員一覧」にも「森本縫子」の記載が

このように森本縫はキリスト教主義の学校で宣教師に音楽を学び、卒業後も継続してピアノと声楽の勉強を続け、ミッションスクールや他の女子教育機関で唱歌とピアノを教える仕事をしている職業人であり、おそらくは30歳代の独立した女性であった。

5. 合唱メンバーの所属を考える

以上を踏まえて、合唱メンバーを所属別にグルーピングしてみると、ソプラノは宣教師5人、宣教師の家族2人、ミッションスクール関係者2人、音楽家2人、不明4名（外国人3人、邦人1人）の計15人、アルトは宣教師6人、宣教師の家族1人、勤人2人、不明4人（外国人2人、邦人2人）の計13人、テノールは宣教師3人、音楽家1人、勤人2人、不明7人（外国人2人、邦人5人）の計13人、バスは宣教師1人、音楽家1人、外国人教師2人、勤人5人、不明5人（外国人0人、邦人5人）の計14人となる。これらを一覧にまとめたものを「表3：合唱メンバーの所属グループ別人数」として掲げる。

表3：合唱メンバーの所属グループ別人数

声種	宣教師	家族	同僚	音楽家	勤人	不明・外国人	不明・邦人	合計
S	5	2	2	2		3	1	15
A	6	1			2	2	2	13
T	3			1	2	2	5	13
B	1			1	7		5	14
計	15	3	2	4	11	7	13	55

表3を見ると明らかのように、女声はソプラノもアルトも圧倒的に宣教師とその家族（娘2人、夫人1人）及び同僚（キリスト教主義の学校の教員2人）が多く、そうでないのはソプラノの音楽家2人とアルトの勤人2人のみである。これに対して、男声はテノール3人、バス1人と宣教師の数が限られてお

あり、1913年4月10日から高等女学校で、1929年3月31日からは初等科を兼務して、1936年12月10日まで音楽と課外ピアノを担当した旨が記されている（東京女学館百年史編集室1991、巻末付録、16）。

り、企業や大使館や一般の（キリスト教主義でない）学校に勤めている人の方が多い。ここには明らかにジェンダーによる偏位が認められる。

この偏位は構造的なものと考えられる。そもそも合唱の練習は、日中は各人仕事があるため、勢い夕方から夜間にかけてになる。そうすると親に連れられて来る宣教師の娘は別として、若い未婚の女性が単独で夜間の練習に通うといったことは、当時の日本では到底考えられないことであつたろう。男性メンバーの中には、キリスト教主義学校のグリークラブ出身者や、年齢から考えてまだ学生であつたと考えられる人物も含まれているが、女性についてはそのような存在が全く見られないのは、こうした背景によるものと考えられる。

6. 《メサイア》の合唱を歌う女性たち

本稿では、本邦における《メサイア》の最初期の3つの「通し演奏」（1925年の東京での日本初演、1927年の関西初演と東京再演）について、それらの演奏を担った女性の歌い手に着目し、どのようなバックグラウンドを持った女性たちが歌唱を担当したのかを検討してきた。

その結果、まず、関西初演のソリスト2名（ソプラノ独唱のエドナ・アウタブリッジとアルト独唱のステッラ・グレイブス）はいずれも神戸女学院の音楽教師であつた経歴を持つということが判明した。

また、東京再演の合唱メンバーを検討した結果、ソプラノの15人中5人が宣教師、2人が宣教師の娘、2人が宣教師の同僚とも言うべきミッションスクール等の女子校の教員であり、宣教師の関係者が6割を占めていること、アルトの13人中6人が宣教師、1人が宣教師の妻であり、ここでも過半数が宣教師の関係者であることが判明した。これは男性陣の状況、すなわちテノールの13人中3人が宣教師で3割以下、バスの14人中では宣教師が1人のみで、企業等の勤人や学生と思しき人物が加わっているのとは、全く異なる状況であり、明らかなジェンダーによる偏位が認められる。

そもそも《メサイア》は、全53曲中18曲を合唱が占めており、合唱の重要性が高い楽曲である。中でも第2部の連続する3曲の合唱（第24曲から第26曲）

は、音楽的に全くスタイルの異なる3つの合唱が次々と歌われて、大きな聞かせ場を形成する。すなわち第24曲〈Surely He hath borne our griefs〉は激しい不協和音に満ちたホモフォニーの楽曲で、第25曲〈And with His stripes we are healed〉は徹底的にポリフォニックなフーガとして書かれ、第26曲〈All we, like sheep〉は極めて描写的な音楽スタイルで書かれている。1920年代の日本で、高度なポリフォニー曲の連続する《メサイア》の合唱を英語で歌える層は限られており、これらの歌唱に関して、女性宣教師ならびに宣教師に連なる人々の参加がくっきりと浮かび上がってきたのである。

参考文献

- 大阪コーラルソサエティ70年史編集委員会編 1999『大阪コーラルソサエティ70年史』大阪：大阪コーラルソサエティ70年史編集委員会
- 奥田耕天 1975「日本におけるメサイア初演」『礼拝と音楽』7：23-24
- 河村泰子 2020「本邦における《メサイア》受容について」『音楽を通して世界を考える—東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集』東京：東京藝術大学出版会 54-76
- 関西学院七十年史編集委員会編 1959『関西学院七十年史』西宮：関西学院七十周年記念事業中央委員会
- 武内博編著 1995『来日西洋人名事典（増補改訂普及版）』東京：日外アソシエーツ
- 津上智実 2010「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907～1923）の資料的価値とその内実」『神戸女学院大学論集』57-2, 141-153
- 津上智実 2017『C.B. デフォレスト書簡の解説（Ⅱ）（1920～1926）』神戸女学院大学「宣教師文書」研究会
- 津上智実 2018『同上（Ⅲ）（1927）』同上
- 津上智実 2020『同上（Ⅴ）（1930～1931）』同上
- 鶴橋泰二 1927『現代音楽大観』東京：日本名鑑協会
- 東京女学館百年史編集室 1991『東京女学館百年史』東京：東京女学館
- 長井齊 1979「わたしと教会音楽Ⅴ」『礼拝と音楽』23, 54-59
- 長井齊 1980『み翼のかけに—合唱音楽と共に歩んで』大阪：大阪コーラル・ソサエティ
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 1988『日本キリスト教歴史大事典』東京：教文館

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 2020『日本キリスト教歴史人名事典』東京：
教文館

長谷川千彰、富岡ひとみ 2006「音楽教師一覧表」神戸女学院史料室『学院史料』21：
13-17

ジャン・クランメル編 1996『来日メソジスト宣教師事典』東京：教文館

宮崎小八郎 1926『基督教年鑑 1927』東京：日本基督教連盟

Mayer, Paul S. 1928: *The Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Yearbook
of Christian Work, 26th Issue*, Tokyo: The Federation of Christian Missions in Japan

Oltmans, A., 1925: *The Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Yearbook of
Christian Work, 23rd Issue*, Tokyo: The Japan Times & Mail

Oltmans, A., 1926: *The Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Yearbook of
Christian Work, 24th Issue*, Tokyo: The Japan Times & Mail

The Japan Christian year book 1932-1940, Christian Literature Society

The Directory of Japan for the year 1927, Yokohama: Directory of Japan Publishers. *The
Christian Movement in Japan, Korea & Formosa, A Year Book of Christian Work,
22nd Annual Issue*, Federation of Christian Missions, 1924

*The Japan Mission Year Book, The Christian Movement in Japan & Formosa, A Year
Book of Christian Work, 26th Issue*, 1928

Watkins Shaw ed. 1992, *Messiah by G. F. Handel*, Novello Handel Edition.

The Biography of British Diplomats in Japan, 1859-1945

(謝辞) 本稿は神戸女学院大学研究所2020年度研究助成「ヘンデルのオラトリオ《メサ
シア》の演奏史(その2)」によって支えられていることを記して感謝する。

